No161　多形腺腫　　熊本赤十字病院　　坂本康弘

患　者：６４歳　女性

現病歴：２年前自覚した右耳下腺腫瘍。前医での細胞診 Class Ⅲの診断で当院受診。右耳下腺内に 20mm 大の mass を認め耳下腺穿刺が施行された。

検　体：耳下腺穿刺液

＜細胞診所見＞

核異型の弱い細胞が多数採取されています。紡錘形細胞と粘液を含有する細胞が見られます。背景には、ギムザ染色でメタクロマジーを示す粘液を認めます。粘液化生を伴う Pleomorphic adenoma が示唆されますが、粘液含有細胞が多くみられ low grade 粘表皮癌（多形腺腫由来癌）との鑑別を要する細胞像です。

＜組織所見＞

線維性皮膜に被覆された境界明瞭な腫瘤で、腺管成分、その周囲に増生する筋上皮細胞と粘液性間質成分が認められる。その中に、粘液化生を示す粘液含有細胞がみられる。組織学的には多形腺腫です。

＜鑑別点＞

多形腺腫と low grade 粘表皮癌（多形腺腫由来癌）との鑑別を要する症例であった。穿刺液検体に、多形腺腫の細胞像と粘液細胞が多く出現していたため low grade 粘表皮癌（多形腺腫由来癌）が否定できなかったが、詳細な観察をすることにより扁平上皮細胞や中間細胞の出現がなかったことから鑑別可能と思われた。多形腺腫において扁平上皮化生、粘液化生、好酸性細胞化生などが起こることを念頭において診断すべきと考える。

＜参考資料＞

唾液腺腫瘍アトラス
2015 版細胞診ガイドライン５　消化器